

校長室通信

令和6年10月1日号
志免町立志免西小学校
高良 祐治

猛暑、酷暑といわれる日々が続いた今年の夏もようやく落ち着きを見せてきました。熱中症指数がいつも警戒値を超え、ずっと外で遊べない日々を我慢していた子どもたちも、最近は運動場いっぱい元気な駆け回ることができるようになりました。自然環境の変化には抗えませんが、運動場に誰もいない、元気な子どもの歓声が聞こえてこない小学校には違和感があります。来年の夏は“あたりまえ”の学校生活を送ることができるのでしょうか？

さて、「暑い、暑い」といっているうちに気がつくと前期の終了を迎えようとしています。学年の半分を終えるにあたって、がんばったことやできるようになったことを確かめると共に、後期に力を入れるべきことや取り組むべきことを見通せる学期末にしてほしいと思います。

関わる経験の大切さ

先日、盲導犬の訓練士の方の話を聞く機会がありました。実際に訓練の様子を見せていただきながらお話を伺ったのですが、学校教育に通じるところが多いことに驚かされました。

盲導犬は、生後2ヶ月から約1歳までをパピーウォーカーと呼ばれるボランティアのところで過ごします。その間、たくさんの愛情を注ぐのはもちろん、様々なところに積極的に出かけたり多くの人々に関わったりするなど、様々な経験を積ませることが重要なのだそうです。

盲導犬として活動し始めれば、ユーザーの目となって、誘導しなければなりません。外には自動車や自転車、猫や犬等の動物、そして多くの人々がいます。それ以外にも、様々な音や香りなどもあり、それらの状況下で戸惑うことなく行動する必要があります。そのためにも同じようなものを「見たことがある」「聞いたことがある」等の経験が大切なのだそうです。

これは、子どもたちの小学校への入学やクラス替え、席替えなどにも共通することだと思いました。学校はたくさん子どもや先生がいます。その中で、怖じ気づくのではなく、積極的に関わっていこうとするためには、それまでの様々な人や物との関わりの経験が必要です。TVゲームやスマホの画面越しだけの世の中との関わりではなく、気温や音、匂いなどの“空気感”を感じながらの関わりが大切ですね。

役に立っている充実感

盲導犬は、約1歳から約1年間の訓練を経て、10歳までの約8年間、盲導犬として活躍します。この

間、目の不自由なユーザーと生活を共にしながら、安定した安全な誘導をし続けることが求められます。

そのための訓練で大切にしていってほしいことは、できたときにすぐほめることと信頼関係を築くことだそうです。というと、できたらすぐにえさを与える方法が思い浮かびますが(イルカのショーなどでおなじみですね)、目の不自由なユーザーには難しいことです。また、できるまで厳しくしかりながら訓練する方法もありそうですが、これだと訓練士からユーザーに預けられ「もう怒られない」とわかったら、だんだん誘導をしなくなるそうです。

子どもたちの教育も同じことが言えると思います。「テストで100点を取ったらお小遣いを…」「通知表で『よくできる』が〇個以上あったら…」といったご褒美を目的とした学習は、時々はいいいのかもしれませんが、生涯を通じて学んでいこうとする子どもを育てるためには、悪影響の方が多いいのかもしれません。また、厳しくしかりながら勉強をさせる方法も、しかる人がいなくなればたちまちやらなくなりそうです。

盲導犬を希望する方は約1ヶ月、訓練センターで寝食を共にしながらよきパートナーとなるための練習を重ねるそうです。その中で、うまく誘導してくれたときはすぐにほめることで、盲導犬自身が「この人のために役立つこと」に喜びを感じるようになっていくのだそうです。

前号(9月3日)で、「ほめると本当にいいのか」ということを書いており、なんだか矛盾しているようにも感じますが、やみくもにほめるのではなく、信頼関係を深めながらほめることの重要性を考えさせられた盲導犬との出会いでした。